

## 演題② 演者

# 伊藤 勇 先生 保谷伊藤眼科 院長

## Leica社Proveo8を使用した、 ドイツ製他社顕微鏡ハードユーザーの忌憚なき私見



演者は所属していた昭和大学、及びその関連病院全てで用意されていた他社顕微鏡を使用し、必然的にその他社顕微鏡での見え方が自然となって20年以上が経過した。眼内レンズが自費だった時代の、実家の古い顕微鏡も同じ他社製のため違和感なく使いこなしていた。例外として2009年留学先のCalifornia州立大学Irvine校の硝子体班のみLeica社製顕微鏡+BIOMでの経験を持つ演者だが、非接触ワイドビューイングが物珍しく(当時日本未上陸)、このようなものと受け入れていた。

大学在籍時は硝子体手術および緑内障手術を専門として年間1000件以上を施行し、他社ワイドビューイングシステムを日本初上陸時より全ての硝子体手術に使用、ERM、黄斑円孔、増殖硝子体網膜症、未熟児網膜症も全て黄色と緑のレンズを用いて施行し、関連病院での硝子体手術には他社ワイドビューイングシステムを用意してもらうことを条件とするほどの傾倒ぶりであり、開業後も同様である。今回、Proveo8を3日間使用させていただくチャンスを与えられ、少ない症例数(硝子体手術3件・緑内障手術6件・白内障手術21件・ニードリング1件・抗VEGF抗体8件)ではあるが、その経験より2機種の違いなど感じたことを述べさせていただく。

## 演題③ 演者

# 松本 惣一 先生 松本眼科

## 「ノーチラス号 海底二万里」 「Proveo8 EnFocus 眼底二万里」



ガイダンスシステムの使用はプレミアム白内障手術を行う施設では珍しくないが、硝子体手術ではどうだろうか。黄斑部疾患は繊細で高い精度を要求される手技が多く、また増殖性糖尿病網膜症のように繊細ながら大胆な手技や手法を必要とする症例も少なくない。そこで、私は硝子体手術にこそガイダンスシステム(支援システム)が必要なのではないかと考え、術中OCT「ライカ社製 EnFocus」を導入した。このOCT装置は2タイプ「HD」と「deep」がある。「HD」は網膜硝子体に適した高解像度タイプで、「deep」は奥行きを優先し前眼部から後眼部まで幅広くカバーできる万能タイプである。使い始めるとその有用性と利便性には目を見張るものがあり、網膜硝子体手術の眼底所見のみならず白内障手術や緑内障手術など前眼部所見も、今では安心して手術を行うための欠かせないツールの一つになっている。

若い世代にはあまり知られていないかもしれないが、ジュール・ヴェルヌ作の「海底二万里」という冒険小説がある。それはモネ船長が「潜水艦ノーチラス号」で海底に潜んでいる怪物を退治し美しい海底を取戻す物語である。ディズニーシーアトラクション「ミステリアスアイランド」のテーマでもある。網膜硝子体術者が術中の眼底で予期せぬ魔物に遭遇することがあるが、「眼底二万里」に美しい世界を取り戻すために、今こそ、ライカ手術顕微鏡「Proveo8 EnFocus号」を乗りこなしてみようではないか。

本会ランチョンセミナーは整理券制となります。

配布場所：東京国際フォーラム B2F ホールE内 配布時間：2020年1月24日(金)8:00~11:00 (※無くなり次第、終了)

※飲食数には限りがございますので、予め承ください。※会場には整理券をお持ちの方から優先的にご入場いただけます。※整理券は、セミナー開始と同時に無効となります。